

てきすとほい杯



『ラスト・スタンディング』  
晴海まどか

『夏の終わりの汚れたブルー』犬子蓮木

『寄り道』塩中吉里 『みんなの笑顔のために』茶屋

オンライン競作  
+ 執筆オフ@新宿  
同時開催!



# 目次

---

てきすとぼい杯について

[てきすとぼい杯について](#)

[第14回 募集要項](#)

[執筆オフ参加要項](#)

[第14回 審査結果](#)

[入賞作品紹介](#)

## 《大賞》

『ラスト・スタンディング』 晴海まどか 獲得☆ 4.059

## 《入賞》

〈大雪の夏賞〉

『夏の終わりの汚れたブルー』 犬子蓮木 獲得☆ 4.000

『寄り道』 塩中吉里 獲得☆ 3.933

『みんなの笑顔のために』 茶屋 獲得☆ 3.875

〈候補作品〉 ※得票順

『♪さようなら、○ちゃん』 太友 豪 獲得☆ 3.812

〈お題の追加オーダー賞〉

『人類の永遠の戦い』 るぞ 獲得☆ 3.714

『国旗掲揚』 雨森 獲得☆ 3.667

『ひどい話』 永坂暖日 獲得☆ 3.667

『監視カメラ』 ドーナツ 獲得☆ 3.643

〈執筆オフ・ルポタージュ賞〉

『バッドエンドについて』 ayamarido 獲得☆ 3.400

『ハイパーメディアクリエイター（笑）』 松浦徹郎 獲得☆ 3.312

〈集計外作品〉 ※投稿順

『最初に目に映ったものは』 志菜 獲得☆ 3.571 (制限時間後に投稿)

終わりに

終わりに

執筆オフ当日の様子

てきすとぼい広告

奥付



「てきすとぼい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぼいは、2012年2月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集うWEB作家の有志で開発を進めております。

2013年初頭に、ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、同年1月より てきすとぼい主催の競作イベント「てきすとぼい杯」を開始いたしました。



「てきすとぼい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぼい杯は、制限時間1時間+推敲15分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

### 第14回てきすとぼい杯〈オン&オフ同時開催〉

会場 : <http://text-poi.net/vote/51/>

お題 : バッドエンド

「これはバッドエンドだ!」と思う結末で、小説を書いてください。

投稿期間 : 2013年2月8日 18:00 ~ 同日 19:15

審査期間 : 2013年2月8日 20:00 ~ 2013年2月16日 24:00

投稿期間中のTwitterまとめ : <http://togetter.com/li/627581>

てきすとぼい杯初の執筆オフ同時開催となった第 14 回は、執筆オフご参加の 4 作品を含む、計 12 作品をお寄せいただきました。

あいにく当日は関東全域が記録的な大雪に襲われ、欠席・帰宅困難の方が出してしまうなど、大変な開催日となってしまいましたが、最終的に執筆オフに 4 名（+運営 2 名）、オフ中継に 6 名のご参加をいただきました。

## 第 14 回募集要項

---

### 【投稿について】

投稿期間：

2月8日（土）18:00 ～ 同日 19:15

制限時間 1 時間の中に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時刻になりましたら、会場やてきすとぼい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/51/>

てきすとぼい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より 1 時間で執筆、その後 15 分で推敲&投稿してください。

締切は同日 19:15 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

※執筆オフ会場にて通信回線トラブル等が発生した場合、

特例として、執筆オフご参加者のみ、締切時間を延長させていただく可能性があります。

### 【審査について】

審査期間：

2月8日（日）20時 ～ 2月16日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとぼいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。

個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

### 【開催日の候補】

候補日：

2014年2月8日（土） または 15日（土）

開始時間：

18:00 お題発表・執筆開始予定

※ 執筆オフ会場の使用可能時間につきましては、各会場幹事までお問い合わせください。

### 【執筆オフご参加にあたって】

執筆オフの流れ：

お題発表前までに、オフ会場に集合

↓

ノート PC などの接続確認

↓

暫定 18 時、お題発表・執筆開始（会場によって、可能であればハングアウト中継）

↓

暫定 19 時 15 分、執筆終了（ハングアウト中継そのまま継続）

↓

作品を肴に、飲食（ハングアウトでも打ち上げ）

↓

会場ごとに解散

お持ちいただきたいもの：

執筆用のノート PC 類

・ Wi-Fi 接続が可能なもの

（※会場によって回線状況が異なりますので、当日までにご確認ください）

・ または USB メモリやメモリカード等でデータ受け渡しが可能なもの

幹事さんのみ : ハングアウト接続用マイク (お持ちであれば)

参加費用 :

会場費および飲食費を割り勘の予定

### 【参加ご希望 & 幹事様募集】

東京オフ :

- 開催地    — 新宿       ※会場および連絡先は、ご参加者にDMでお知らせします。
- 集合時間   — 17:30 より会場使用可能です。遅れて到着する場合は予定時刻をお知らせください。
- 幹事       — てきすとぼい杯運営担当 (予定2名)
- 参加費     — 4,000 円前後を予定       ※個室、電源・Wi-Fi フリースポットのある会場です。

他都市開催 :

開催地のご希望、および、幹事を引き受けてくださる方を募集  
※幹事様には、会場費・飲食費の管理、投稿時間中のネット接続状況の確認等をお願いする予定です。

問い合わせ先 :

ご参加可能な地域を添えて、[てきすとぼい Twitter](#) までお問い合わせください。

※ 2月8日に参加可能という方が多かったため、開催日は2月8日に決まりました。  
また東北オフもご希望者があり、調整しておりましたが、雪の深い季節で長距離の移動は負担も大きいため、ハングアウト中継によるご参加となりました。

企画と参加者募集の経緯まとめ : <http://togetter.com/li/606045>

## 第 14 回審査結果

---

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1 位 ☆ 4.059

『ラスト・スタンディング』 晴海まどか

<http://text-poi.net/vote/51/9/>

投稿時刻: 2014.02.08 19:17 最終更新: 2014.02.08 19:20

総文字数 : 2512 字

2 位 ☆ 4.000

『夏の終わりの汚れたブルー』 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/51/6/>

投稿時刻: 2014.02.08 19:06

総文字数 : 2455 字

3 位 ☆ 3.933

『寄り道』 塩中吉里

<http://text-poi.net/vote/51/5/>

投稿時刻: 2014.02.08 19:02 最終更新: 2014.02.08 19:13

総文字数 : 2297 字

4 位 ☆ 3.875

『みんなの笑顔のために』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/51/2/>

投稿時刻: 2014.02.08 18:48

総文字数 : 1598 字

5 位 ☆ 3.812

『♪さようなら、○ちゃん』 太友 豪

<http://text-poi.net/vote/51/4/>

投稿時刻: 2014.02.08 19:00 最終更新: 2014.02.08 19:02

総文字数 : 883 字

6 位 ☆ 3.714

『人類の永遠の戦い』 るぞ

<http://text-poi.net/vote/51/8/>

投稿時刻: 2014.02.08 19:14 最終更新: 2014.02.08 19:18

総文字数 : 1737 字

7位 ☆ 3.667

『ひどい話』 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/51/10/>

投稿時刻: 2014.02.08 19:18

総文字数 : 1765 字

7位 ☆ 3.667

『国旗掲揚』 雨森

<http://text-poi.net/vote/51/3/>

投稿時刻: 2014.02.08 18:56

総文字数 : 1362 字

9位 ☆ 3.643

『監視カメラ』 ドーナツ

<http://text-poi.net/vote/51/7/>

投稿時刻: 2014.02.08 19:14

総文字数 : 492 字

(集計外) ☆ 3.571

『最初に目に映ったものは』 志菜

<http://text-poi.net/vote/51/12/>

投稿時刻: 2014.02.08 21:48

総文字数 : 992 字

10位 ☆ 3.400

『バッドエンドについて』 ayamarido

<http://text-poi.net/vote/51/11/>

投稿時刻: 2014.02.08 19:19

総文字数 : 1280 字

11位 ☆ 3.312

『ハイパーメディアクリエーター (笑)』 松浦徹郎

<http://text-poi.net/vote/51/1/>

投稿時刻: 2014.02.08 18:43

総文字数 : 921 字

※ 執筆オフ中継中に著者インタビューを行いました関係で、執筆オフ参加作品は制限時間を5分延長し、19:20 締切としております。

締切 19:20 対象作品：

『夏の終わりの汚れたブルー』 犬子蓮木さん

『ラスト・スタンディング』 晴海まどかさん

『ひどい話』 永坂暖日さん

『バッドエンドについて』 ayamarido さん

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/51/>

《大賞 1 作品》

---

獲得☆ 4.059

『ラスト・スタンディング』

<http://text-poi.net/vote/51/9/>

著：晴海まどか

サークルのみんなで、海に行くはずだった。

なのに、目覚めたのは小さな住宅街。私たちの他には、誰もいない。街の人も、誰も。

先に目覚めていた一人が言った。「俺たち、なんか死んだみたいなんだよね」

細切れに届く事故のニュースと、不意に始まる殺戮……彼らは本当に死んでいるのか？

巧みな構成で先を予測させない青春バッドエンド作品が、てきすとぼい杯 2 人目の連覇を達成しました！

《入賞 3 作品》

---

獲得☆ 4.000

『夏の終わりの汚れたブルー』

<http://text-poi.net/vote/51/6/>

著：犬子蓮木

二年前の、夏。僕は海で溺れ、そして、助けられた。明るくて、とても綺麗な人に。

それから何度か二人で会い、やがて彼女は僕の恋人になった。ハッピーエンド。……表向きには。

心の奥に秘めた本音と、失われるはずだった命の重さと。その狭間で静かにのたうつ、

ハッピーエンドの裏側の物語が、高い評価を獲得しました。果たして二人の結末は――。

獲得☆ 3.933

『寄り道』

<http://text-poi.net/vote/51/5/>

著：塩中吉里

この物語に登場するのは、むしろ目立たない、小さな料理屋です。

毎日通る道なのに、いつからそこにあつたか分からない。でも、一度看板を目にしてしまったら、

気になってその場を離れられない。そんな店にある日、一人のサラリーマンが足を踏み入れ――。  
繰り返される違和感が否応にもバッドエンドを予感させる、悪い夢に酔っているかのような作品でした。

---

獲得☆ 3.875

『みんなの笑顔のために』

<http://text-poi.net/vote/51/2/>

著：茶屋

誰かの役に立つこと。誰かの笑顔を守ること。ヒーローに憧れ、ただそれだけを心がけているはずが、  
何をしても空回りし、何をやっても裏目に出してしまう日々。  
けれどある時、たった一つ、守ることのできた少女の笑顔が、青年を思わぬ運命へと導いてゆく――。  
一行ごと、一段落ごとに、バッドエンドを積み重ねていくかのような、アンチ・ヒーロー物語です。

《特別賞》

---

《お題の追加オーダー賞》

『人類の永遠の戦い』

<http://text-poi.net/vote/51/8/>

著：るぞ

「バッドエンド」ではならず、お題メーカーにて「草」「リボン」の二題を追加し、執筆された作品でした。

---

《大雪の夏賞》

『夏の終わりの汚れたブルー』

<http://text-poi.net/vote/51/6/>

著：犬子蓮木

記録的な大雪に見舞われた執筆オフ会場で、真逆の季節「夏」を主題に描かれた作品でした。

第14回入賞とのダブル受賞となります！

---

《執筆オフ・ルポタージュ賞》

『バッドエンドについて』

<http://text-poi.net/vote/51/11/>

著：ayamarido

東京都知事選の前日でもあった執筆オフ前後の体験を、お題に絡めて軽妙に描いた作品でした。  
(後日談もお楽しみください：<http://p.booklog.jp/book/3746/page/2105406>)

――受賞された皆さま、おめでとうございます！  
素晴らしい作品をありがとうございました。

(次のページから、作品が始まります。)

投稿時刻 : 2014.02.08 19:17

最終更新 : 2014.02.08 19:20

総文字数 : 2512 字

獲得☆ 4.059

《大賞受賞作品》  
ラスト・スタンディング  
晴海まどか

電車で揺られていた。

車窓越しにのどかな田園風景が果てしなく続き、流れていく。どこまでも見覚えのない風景。以前もこの近くを通ったはずなのに。電車と車では、同じ景色でもこうも見た目が異なるのだろうか。

面白いくらい人のいない車両の一番端っこの席で、静かに窓にもたれかかる。ガラス窓に寄せた頬が冷たい。



私を揺り起したのは、阪峰くんだった。私が目を覚ますと、心底ほっとしたように笑みを向けてくれる。何かにつけて私にはもったいない彼氏である。おかげで若干の混乱しかそのときは感じなかった。

私はなぜかアスファルトの上に倒れていた。小さな住宅街の中。首をめぐらすと、阪峰くんをはじめとした見覚えのある面々。ミナちゃん、橋本くん、堂下くん。阪峰くんと私も含め、みんな同じ英会話サークルの仲間だ。

なんだか頭がぼうっとしている。そうだ、みんなで堂下くんの運転で、海に行く予定だったんだ。水着だって新調した。あれ、私のバッグはどこ？

「俺たちさ」

口を開いたのは橋本くんだった。ミナちゃんにずっとアプローチをかけているけど、見事なまでに相手にされていないかわいそうな橋本くん。

「なんか、死んだみたいなんだよね」



電車は単線で、駅に到着するたびに通過待ちがあった。ドアが開いて、少し冷涼な空気が流れ込んでくる。

ここに一人で来ることになるなんて。

こみあげそうになる涙をのみ込んだ。私が泣く資格なんてない。



私以外の四人は、先に目覚めていたらしい。先に目覚めていた、ということからもわかるとおり、彼らも私と同様意識を失っていて、気づいたらこの街にいたそうだ。みんなで乗っていたはずの車や荷物は見つ

からず、着の身着のまま小さな街にいたのだという。

わけがわからない。

「誰かいないの？」

私の言葉に皆は顔を見合せ、首を振った。

「誰もいないんだ」

いつも冷静な堂下くんは、こんな状況でもやっぱり淡々としていた。私は堂下くんの言葉に眉間にしわを寄せた。

「誰もいない？」

と、そのとき、ズボンのポケットに入れていたスマホが震えたのに気がついた。誰かのスマホがメールを受信した音が聞こえる。

「さっきまで電波もなかったのに……」

そうスマホを取り出したミナちゃんが短く悲鳴を上げた。ミナちゃんが先に悲鳴を上げていなかったら、私も上げていたかもしれない。

見たことがないニュースサイトが表示されていた。

『大学生グループ、旅行の途中で交通事故 四名が死亡』

見覚えのある大学名。そして、死亡した四名の身元は確認中との記載。事故現場は、まさに私たちが向かうとしていた観光地。

「……今ここにいるの、何人？」

ミナちゃん言葉に空気が凍りついた。



電車が再び動き出した。なんとなく、両手を見る。

あのとき、最初に動いたのは橋本くんだった。

どこにそんなものを持っていたんだろう、突然ナイフを振りかざした橋本くんは、いきなりミナちゃんの首を切りつけた。円弧を描いて飛び散った赤いものは、私の両手に飛び散った。

悲鳴など上げる間もなく、ミナちゃんが倒れた。

静寂を破るように、再びスマートフォンが震えた。誰かの呑気な着信メロディが流れた。

「……やっぱりだ」

突然の凶行に走った橋本くんは、一人スマホを取り出して笑んだ。

「ここは、死後の世界なんだよ」

ニュースサイトが更新されていた。

『死亡者の身元が判明』

ミナちゃんの名前が掲載されていた。

血だまりの中に横たわるミナちゃんに視線を釘づけにしていた私の手を引いたのは阪峰くんだった。

逃げるぞ、だかなんだか言われたような気がしたがよくわからない。

手を引かれるがままに走って、でも街の出口は見つからなかった。

「ここ、本当に死後の世界なのかな？」

「……だったら、もう全員死んでるってことだろ」

いつの間にか、私たちの後ろに堂下くんがいた。

「生と死の世界のはざまってところだろ」



目的の駅に到着した。自宅から、三時間もかかった。車だともっと近かったのかもしれない。

網棚の上に置いていた大きな花束を手にも、電車を降りる。

潮の匂いが強い。海の近い田舎町だった。

私たちが閉じ込められていたその世界はあまりに狭かった。すぐに追いかけてきた橋本くんに見つかって、阪峰くんと橋本くんが掴み合いになった。阪峰くんはなぜか拳銃を持っていた。橋本くんが額から血を流して倒れた。

「……すごいな」

重みのありそうな黒い鉄の塊を手にした阪峰くんは、それを私と堂下くんの方に向けた。

「ほしいと思ったら、武器が出てくるんだ」

阪峰くんがまっすぐにこちらに銃口を向けた直後、銃声が響き渡った。

堂下くんまで拳銃を構えていた。阪峰くんが倒れる。

今度は悲鳴が出た。肺にある限りの空気を絞り出した。いまだ状況を飲み込み切れていなかった頭が、ようやく回り出したのかもしれない。

何、何、何、なんなのこれ。

拳銃片手に、堂下くんはスマホを取り出した。例のニュースサイトを見ているのだろう。身元不明者はあと一人？ 一体どんなひどい事故だったんだろう。

「……俺さ」

何を考えているのかよくわからない、なんて評されることが多い堂下くんの笑みを、私は初めてみたような気がした。

「お前のこと、わりと好きだったんだよね」



花束を両手で抱え、ゆっくりと歩く。

来たことがあるはずの場所なのに、どうしてこんなにも覚えていないんだろう。

堂下くんが自分のこめかみを撃ち抜いたその瞬間、視界がブラックアウトした。気がつくと、病院の一室に私はいた。

私は、事故での唯一の生存者になった。

潮の香りがどんどん強くなる。さびれた観光地。みんなと来たはずなのにどうしてこんなに――  
――覚えていないのかって？

ふいに、聞き覚えのある声が脳裏に響いた。

「……ミナちゃん？」

――ニュースサイト、よく見てみなよ。

記事にはリンクが貼ってあった。ひとつ前の記事。

――君はさ、まち合わせに間に合わなかったんだよ。あの日、僕たちに合流する前に……

今度は阪峰くんの声だった。

『女子大生、電車のホームから転落』

潮の香りが急に遠のいた。目の前に、あの住宅街が広がっている。

橋本くんの声がすぐ後ろでした。

――やっぱりここは、死後の世界だったんだよ。

振り返る。そこには、懐かしい彼らが揃っていた。

投稿時刻 : 2014.02.08 19:06

総文字数 : 2455 字

獲得☆ 4.000

《入賞作品》

《特別賞・大雪の夏賞》

夏の終わりの汚れたブルー

犬子蓮木

夏。海。僕は溺れて、そして助けられた。助けてもらった人と縁ができて、僕はその人と付き合うことになった。その人は綺麗な人で、僕みたいな何にも才能もなく、容姿も悪いような人間からすれば、もったいないぐらいな人だ。

それなのに、僕の心の中には、わだかまり、もっと言えば違和感のようなものがある。

僕はその人のことを嫌いなのかもしれない。

なんだか会って、それから告白されて、それで返事をした。助けて貰った人に対して、断るなんていう選択肢が選べなかったのだと自分でわかっている。

その人は僕のことを褒めてくれる。

「やさしいね」とか「ひどいことを言わないから」とか。それはいいのだけど、褒める言葉は僕を束縛するのだと僕は思っている。

褒められたならそうしなければならないと、僕は貰った言葉を大切にしまい込んで、心の中で繰り返して、そうして、ほんとうの僕からずれていくことを我慢しなければならない。

僕の中にはやさしくない一面がある。

僕の中にはひどい言葉を発する一面だってある。

XXX！ XXX！

そんな僕の我慢は命を救ってもらったという恩だけを重みとしていつまでも海の底へとゆっくりと沈んでいく。光の届かないプレッシャーばかり増えて行く海の中へと、深々と、暗く暗く。助けてもらったから。

二年後の夏。蝉がじんじんと鳴き、汗が顔をつたって落ちていく日中に、僕とその人は駅前の喫茶店にいた。僕の実家に行って、両親に挨拶をしてきたところだった。

「緊張したね」

「そう？」僕は言う。

「それはするよ」

「あんまりそうは見えなかった」

その人はいつも明るく。まぶしくて、どんな人ともすぐに仲良くなれる。僕の両親もすぐに気に入ったみたいで、僕になんてもったいがないと笑っていた。

「僕になんてもったいがいいよ、ほんと」

「そんなことはないよ」

その人は、ほがらかに笑う。

「明日は海にいこう」

「なんで急に？」僕はたずねた。

「忘れたの？ 記念日じゃない」

「僕が溺れた記念の日」

「そう。だから会えたでしょ」

その人は、あの日のことを笑って話す。僕が死にそうになったときのことを。助かったから笑い話。それはそうなのかもしれない。僕も笑って話すことはある。だけど、そういう気分じゃないときだってある。でも、僕は笑っている。

やさしく。

「はじめて私を見たとき、どう思った？」

「覚えてないよ、大変だったんだから」

溺れて砂浜にあげられて、それからやっと目をあけたときにたぶんその人の顔を見たとは思う。

「天使みたいとかないの？ そのとき好きになっちゃったとか」

「ないね。でもそのあとお礼に行ったときは綺麗な人だなと思ったよ」

そういうとその人はまた笑ってくれる。いつものことだ。

僕の頬から汗が落ちる。ふいに聞いてみたくなった。

「もし僕が嫌いだって言ったらどうする？」

「なにを？」

僕は声に出さず。その人を見つめる。いつもみたいな笑顔がくずれて壊れそうになる。

「なんでそんなこと言うの？」

「ごめん。ただもしいつかそうなったときどうなるのかなって。未来は保証できないし、結婚は墓場だなんて言うでしょ」

「マリッジブルー？」

またその人は笑顔を取り戻した。

僕が不安になったら、僕を助けるのがその人の役目だって、思い込んでいるんだ。僕は僕だけで生きていけるのに、ほんとうは助けがいるのは自分のほうなのに。きっかけがあったから、役割が決まった。性格という表面的なものがあるから、周りから期待されて、束縛される。

「大丈夫だよ。私たちはそんなことにはならない」

「うん」

僕は笑顔を作った。精一杯に笑った。それが僕がしてあげられる唯一のことだから。僕はあのとき助けられたから、消えてしまうはずだった残りの人生の使い道を目の前の人に委ねることになったのだ。

「じゃあ、明日は海ね」

「うん」

海。都内からすぐに行ける海は基本的にきたない。黒くて、ゴミが浮いていて、それでも大勢の人が我慢して楽しんでいる。

僕もその人もデートになんかふさわしくなく泳いでいた。僕はあの日、助けられたけど、実際のところ泳ぐのは得意だった。あのときは足がつって溺れたけど、普通に泳げば負けたりはしない。

もし、今、隣にいる僕の結婚相手が溺れたら、僕は全力で助けるだろう。そうすれば僕と相手をつなげる重く苦しい鎖の束縛は消えてなくなるかもしれない。

どちらが優位でというわけではなく。

対等に。

はじめて向き合えるかもしれない。

そんな切なる願いも当然、叶うこともなく、僕らは砂浜に上がった。

眩しい太陽が綺麗なその人を照らす。プロモーションのポスターみたいに美しい人間が真夏の海で輝いている。僕はそんな眩しい人を映すカメラで、記録する媒体だった。

いつかその人が明るい過去を思い出したくなったときに僕というデバイスを動かして、「どう思った？」なんて僕のスイッチをいれる。

そうして、僕はゆっくりと、美しい歴史の語り部となる。

僕の人生はそのために存在している。

僕が助けられたとき、そう決まった。

恩がある。だから僕はそれで良いと思っている。ただ、僕はその人のことを好きではないのに、僕も好きだと錯覚したままなのは失礼じゃないかという葛藤があるだけだ。

それでいいのかはわからない。

たぶん近いうちに崩壊の瞬間が訪れるのかもしれない。

そうであればいいなと思い、そうなってほしくないとも思う。

「あついなあ」僕は思わず声をこぼした。

「もういっかい行こうか」

「うん」

僕らはまた海に向かって、僕はひとり内緒の願いを神様にする。叶う確率はほとんどない。体にまとわりつく水分は海の水と罪悪感からの汗だろう。暑いからだなんて嘘は、内心でもつきたくはない。一番大事なところで嘘つきなくせに。

海に走ってはいって、深くなったところで泳ぎ出す。僕はその人を追い抜いて、海の中で、汚い水に包まれて、孤独を感じる。ゴールにしていたブイに辿り着いて追いつて来たその人のまばゆい笑顔を見る。

だから来月、夏の終わりに、僕らは契りを結ぶのだ。

やっぱり僕は、その人のことを、好きではないままなのだけだ。

<了>

投稿時刻 : 2014.02.08 19:02

最終更新 : 2014.02.08 19:13

総文字数 : 2297 字

獲得☆ 3.933

## 《入賞作品》

### 寄り道

塩中吉里

会社を出るときは必ずタイムカードを切る。最寄り駅まで歩くのにかかる時間も、下り電車がやってくる時間も、把握している。

だから腕時計を見ずとも、帰りの途上で今が何時なのか分かる。あの時間に会社を出たのだから、このドラッグストアの前を通るときは、九時二十五分を少し過ぎた頃だろう、といった具合だ。普段なら、帰宅中の現在時刻など、あまり気にしない。最寄りのスーパーの閉店時間？ それは自炊を行う者だけが気にしていればいい。どうせ夜食は二十四時間営業のコンビニエンスストアで買うのだし。

私が、寒風吹きすさぶ中、わざわざ足を止め、手袋とコートの際間に埋まっていた腕時計を、そでをまくってまで見直したのは、繁華街に軒を並べているくだんのドラッグストアを通り過ぎたところで、少し意識に引っかかる看板を見かけたからだ。

お食事処。

どんぐり亭。

午後九時から十時。

左矢印。

看板には、そう書いてある。矢印の先を見ると、民家と見まごうような、背の低い平屋の一軒家が、両隣のドラッグストアと雑居ビルに押しつぶされるような格好で建っている。入り口は木の引き戸のようで、幅が狭く、それがまた民家らしさを助長している。だがそんな見た目の情報はわりとどうでもいいことで、私の気を引いたのは、一時間しかない営業時間の短さと、常日頃から通勤路として使用していた経路にこのような店があったのかという、純粋な驚きの二つだったのだ。

手首が冷たかった。

腕が冷えることと引き換えに、腕時計は正確な時間を教えてくれた。九時二十七分。

寒い。

辺りには良い匂いがただよっている。

肉じゃがに似ている。

寒いな。

二十七分なら、まだ大丈夫そうだ。

大丈夫そうだって、なにが？

寒さは思考を断片化させる。ぼんやりした自分自身に問いを投げかけて、ようやく私は、この良い匂いの出所と思われるどんぐり亭に入ろうとしているおのれを自覚した。

引き戸には擦りガラスが入っており、中の、明るいだいだいの色味が強い光を透かし見せている。

私は手袋も脱がずに戸を引き開けた。

途端に、中からふきだした、むっとする熱気が顔に当たる。店の中は外観の通りに狭く、手前がカウンター席で、客は三人いて、私はほんの少し安堵して、後ろ手に戸を閉めた。

カウンターの内側には店員が二人いた。あたたかな湯気の出どころは、しかしカウンターの中ではなかった。カウンターの奥にカーテンが引かれており、その向こうから、熱気はふきだしてくるようだ。火を扱うときは、奥の厨房に引っ込むのだろうか。一通り店内を見渡して、私の目は二人の店員のところに戻ってきた。

そういえばいらっしゃいませの一言もかけられていない。

そういう、店なのだろうか。

そのとき、とんとん、という音がした。音はカウンター席の一番奥から聞こえてきた。客の一人が、指でカウンターを叩いていた。

「いらっしゃいませ」

「いらっしゃいませ」

指が合図だったのだと言われても信じてしまいそうだった。突然、私のほうに向き直り、声をそろえて挨拶をしてきた店員に、少し辟易する。厭な店だと感じた。なぜこんな店に入ってしまったのだろう。

あの、食事を。

「メニューはこちらになります」右の店員が言う。

では、その。カレーライスを。

「かしこまりました」左の店員が言う。

心にもないことを言ってしまった、と思った。カレーなど食べたくなかった。だが、早くこの店から出たかった。カレーならば作り置きをしているだろう、すぐに食事が出てくるだろう、という打算の結果の注文だった。

「カレーライス！」左の店員が、奥の厨房に声をかける。奥にも誰かがいるらしい。

カウンター席の、空いている席は二つで、私は入り口に一番近い席を選んだ。

他の客は、肉じゃがみたいなものを、たぶん肉じゃがなのだろうが、その肉じゃがをぼそぼそと口に運んでいた。ときおり、カウンターを指でとんとんと鳴らす客がいる。その意図は分からなかった。店員は、反応することもあれば、無視することもあった。しばらくすると、奥の厨房から、白い湯気がただよい出てきた。

その間私はおとなしく待っていた。

気づまりな空気の中、カレーが出来上がるのを待っていた。

しゃべることもはばかれる、厭な気分だけが増してくる時間だった。

そうこうしているうちに、いつの間にか、腕時計は九時五十五分を指していた。もう閉店時間も近いというのに、カウンターの中にいる二人の店員は、奥の厨房を急かす様子もなく、ただ突っ立っている。

すでに他の客は、皆、出されていた皿を空にしていた。だというのに誰も帰らない。カウンター席に座ったまま、立ち上がらない。ただ、思い出したかのように、ときおり指でカウンターを叩くだけだ。

あの。

私がとうとう声を出したのは、いよいよ時計の針が九時五十九分を回ったときだった。

もう帰ります。

そう言って、席を立った。気は急いでいたのに、足は痺れていた。痺れがおさまるのを、私は半ば焦りながら待った。

ようやく動けるようになって、カウンターに背中を向けて、引き戸に手をかける。戸の隙間から冷気を感じる。外は寒いだろうが、そんなことはどうでもよかった。力を込めて戸を引くと、手ごたえが返ってきた。

開かない。

戸は開かなかった。

腕時計の針は十時を回っていた。営業時間は終わっていた。

とんとん、と音がした。

とんとん。

とんとん。

振り返ると、二人の店員が、三人の客が、皆が私を見ていた。皆がカウンターを指で叩いていた。

とんとんとんとん。

だんだんと音がそろってくる。同調するように、奥の厨房から漂い出ていた白い湯気の勢いが強まる。

とんとんとんとん。

間仕切りしているカーテンがゆらめいた。

投稿時刻 : 2014.02.08 18:48

総文字数 : 1598 字

獲得☆ 3.875

《入賞作品》  
みんなの笑顔のために  
茶屋

誰かの役に立ちたい。

誰かのために何かをしたい、そう思って生きてきました。

たぶん子供のころ見たアニメか特撮の影響だと思います。

つまりは皆の笑顔を守るヒーローになりたかったんです。

でもまあ所詮ヒーローになるなんてのは夢物語ですよ。

だから、諦めました。諦めたといって全部が全部を諦めたわけじゃないんです。

ヒーローにならなくてもいい。皆の笑顔じゃなくてもいい。

目の前の、誰かの笑顔を守る。

身近なところからやればいい。

けど、それが難しいですよ。意外と。

急な階段を上る老人を手伝ってあげようと荷物を持ってあげると泥棒と勘違いされたようで荷物の掴み合いになり、勢い余って老人が階段を転げ落ちて行ってしまったこともありました。すぐに老人を助け起こそうとしましたが、もう息がありません。

また別の時には貯水槽の周りで遊んでいる子供がいたので注意することにしました。ちょっと声をかけるだけじゃ効き目がないので大きな声でしっかり怒ります。すると子供は驚いてしまったようで、その拍子に用水路の中に落ちてしまいました。

はじめから大それたことをやるからいけないのです。もっと小さなことから始めなければいけなかったのです。

街の掃除から始めてみました。空き缶やら何やらを拾って一か所に集めます。すると集めたところに自転車に乗った高校生が突っ込んできて、そのまま前のめりに車道に飛び出し、そこへ車がやってきました。

またある時は、迷惑駐輪を整理しました。まあよくあることですが、自転車と自転車のあいだが狭いので、自転車にぶつかってドミノ倒しというのがあるわけですね。それが倒れていった先にまあ、ね。

そんなわけでやることなすこと裏目に出てばかり。一向に誰かの笑顔を守ることはできていません。

そんな私にも転機が訪れました。

ふと夜道を歩いていると、一人の少女が息を切らして走ってくるではありませんか。

さらにその後ろから数人の男が後を追ってきます。

少女は私を見た瞬間助けを求めるわけです。  
私はその瞬間、奮い立ちました。  
これこそ子供のころの夢。  
ヒーローになれる瞬間ではありませんか。  
私は体中に力が沸き立つのを感じました。  
もう相手が屈強な男だろうが、銃を持っていようが関係ありません。  
たちまちのうちに黒服の男たちを叩きのめすと、少女のほうを振り返ります。  
笑顔です。念願の笑顔です。純粹で、可憐で、優しさのこもった笑顔。  
いえ、どんな笑顔でも良かったというのが、間違いだったのです。  
守りたかったのは、この笑顔だったのだと、確信しました。  
このかけがえのない笑顔を守っていかなければならない。そう強く感じました。  
その後も、彼女を追うものたちは現われましたが、私は政府の人間だろうが軍の戦闘兵器だろうがどんな強敵が現われても負けませんでした。  
彼女の笑顔を守って見せる。  
たとえ、どんなことがあろうとも。  
まさにヒーローです。  
笑顔を守るヒーローになったのです。

でも、彼女の笑顔を守ることはできませんでした。

結局、誰の笑顔も守ることはできませんでした。  
みんな、みんな。  
死んでしまいました。  
誰も笑ってはくれません。  
私が守った彼女の笑顔。  
私が守った彼女自身が、すべての元凶でした。  
彼女はウイルスのキャリアーだったのです。彼女の体液に接触した人間は皆ゾンビになってしまい、ゾンビの体液に接触した人間は皆ゾンビになってしまいます。  
彼女は症状が出るのが遅かったようですが結局ゾンビになってしまいました。  
もう笑ってはくれません。  
皆、皆、ゾンビになってしまいました。  
もう誰も笑いません。  
生き残ったのは、何故かウイルスに耐性のあった私だけ。  
耐性といってもゾンビにならないだけで影響は受けています。  
今思えば銃弾で死ななかつたのも、異様な力を発揮できたのもウイルスのせいなのでしょう。  
私一人だけが生き残り、誰も笑ってくれないこの世界で、  
私は、ゾンビを殺し続けています。

投稿時刻 : 2014.02.08 19:00

最終更新 : 2014.02.08 19:02

総文字数 : 883 字

獲得☆ 3.812

## ♪さようなら、○ちゃん

太友 豪

大きなキャリーカートを引いたたくさんの人たちが、楽しげな笑みを浮かべて足早に通り過ぎていく。

ここはとある駅。その2二階部分に当たるコンコースである。

天井に埋め込まれたスピーカーから心が浮き立つような明るい調子の音楽が賑やかに流れてくる。その音量に負けにくいくらい大きな声でふざけあっている少女達。

少数の例外を除いて、駅はあくまでも通過点でしかない。だから、乗客達の目的地のイメージに合わせてこぎれいにデザインされた駅自体に目を向ける人はほとんどいない。

3階のホームと2階のコンコースとをつなぐ四列並んだエスカレーターの手前にコインロッカーがある。いわゆる交通系非接触ICカードでも支払いすることができる新しいものだ。

コインロッカーのほとんどには赤いランプがともっている。そのロッカーがすでに使用されているということだ。

首都圏外からも多くの利用客が来るこの駅では、大きなコインロッカーから先に埋まるという傾向がある。遊園地の近隣のホテルは高いので、大きな荷物をロッカーに預けてから遊び、夜になったら荷物を取り出して離れたビジネスホテルなどに宿を求めるのだ。

だから誰も、コインロッカーの前で長々と立ち止まったりしない。

少し不審なことがあっても、自分に直接関係がなければ素通りするだけだ。

「ねえ、赤ちゃんの泣き声しない？」

飛行機と電車を乗り継いできた女の子は、中学時代からの友人に向かって尋ねる。

熊のぬいぐるみを抱いた友人は肩をすくめてみせる。

二人は運良く一番大きなサイズのロッカーを確保することができた。このサイズなら二人のキャリーカートを入れることができる。大型ロッカーの上にはいくつか小型ロッカーがあいているが、それでは小さすぎて二人のキャリーカートをしまうことができないのだ。

他の人も一番ちいさなロッカーに用もなければ、興味を抱くこともなく足早に過ぎていくだけだ。

「そんなことよりはやくいこうよ！ もうオープンしちゃうよ」

その日、二人は心ゆくまで楽しんだ。

こうして、まだ名前もない誰かさんは、縦・横34センチ、奥行き57センチの鍵のかかっていないロッカーの中で死んだ。

投稿時刻 : 2014.02.08 19:14

最終更新 : 2014.02.08 19:18

総文字数 : 1737 字

獲得☆ 3.714

《お題の追加オーダー賞》  
人類の永遠の戦い  
るぞ

【伝説】

ある時期から、人類の誰もが知った伝説がある。

昔々、ある男が、寺院で不思議な女性と出会い、逢瀬を重ね、やがて一本の草を渡されたという伝承があった。

草はリボン結びに結ばれており、彼女はまた会う約束として、この草の結び目を、解かない様にいつけたのだという。

あるいは、そんな言いつけはなかったのだとも言う。

いずれにせよ、これらの説話は、「事件」が起こってから流れたものであり、後付の創作なのか、実際に起こったことなのか、人類にそれを知るものはいなかった。

【来歴】

確かなことは、古代の遺跡である寺院から、リボン上に結われた瑞々しい草が発見されたこと。

そして研究室に持ち帰った考古学者が、草をほどいて弄繰り回しているうちに、いつの間にか草が二束に増えていた、ということだ。

草は数時間後にさらに倍になった。

分裂して増え続けていたのだ。

これに気づいた学者は、慌てて草を燃やして

燃やした灰からも草が分裂して増えてしまった。

切り刻んでも、酸につけて溶かしても、その跡から草は分裂し続けた。

このまま倍々のペースで増え続ければ、いずれはこの世界を埋め尽くすようになる。いや、それ以前に自重で押し合って潰れ合い、ブラックホールと化すだろう。

燃やし続ければ無限の燃料になるかも、と一昔前なら思ったかもしれないが、常温核融合炉が安定して稼

動する現代においては、エネルギー供給元としての価値もなかったし、なにより灰が無尽蔵に増えては、結局宇宙の破滅は避けられない。

凍らせれば分裂速度は下がったが、しかし絶対零度下に置いても、分裂が止まるわけではなかった。

最終的に人々は、この草を全て光速宇宙船に乗せて、時間を可能な限り遅らせることで決着を見ることにした。

光速宇宙船はメンテナンスの都合から、遙か彼方へ飛んでいってしまうのではなく、円を描く起動で飛び続ける。

しかし、ある研究員はこっそりと、この草を一本だけ宇宙船に草を乗せずに保存していた。

液体窒素に漬け込んだ草を、解凍した彼は、それを伝説にあるのと同じようにリボン結びにして、かつて恋する女性へと贈った。

彼は過労で心をわずらっており、強い自殺願望を抱いていた。

結局人類を巻き込んだ、自殺と、最後の思い出をロマンティックに飾る、一石二鳥の手段として、こんなことを思いついてしまったのだ。

---

#### 【結末】

「それで、人類はそいつの自殺に付き合わされて、滅びる破目に……なる予定だったわけだ」

私の目の前で、男は笑った。

「そう。でも、それこそが解決方法だったのだな」

10年の付き合いがある、人間として考えれば、十分親友と呼べる月日をとともに過ごした男に、私は答えた。

「まさか、リボン結びにしてある間は、増殖しないとはな」

「人類はすぐさま、宇宙船を止め、草を全てリボン結びにした後、残らず燃やし尽くした。結ばれた状態で萌えた草は、増殖能力を失っていたため、これにて絶滅が完了した」

「……まあ、これはその残滓ってところだがな」

男はディスプレイに写ったニュース記事を指差した。

草の殲滅作業にかかわった、マルコという名の研究員が、こっそり草を持ち逃げしようとして、逮捕され、国家反逆罪で処刑されたというニュースだ。

「あれは対処法を知らなければ、手のうちようがないし、人手に負えない量までこっそり増やされれば、対処法を知っていてもどうにもならない。見つからないところに隠した「草」を解くぞ、と脅しをかけることも出来る。地球を人質にする兵器として使えるってわけだ」

気の毒に、と思いながら、我々は地球から去った。

人間への擬態を解きながら、私は悲しい気持ちを味わっていた。

人間の女性に擬態した同胞を使って、かつて地球に我々の植物を送り込んだプロジェクトは失敗に終わったのだ。

地球上の誰もが知っていた。

トウモロコシとイモを中心とした栽培技術が極端に発達し、栄養素が多く取れるようになった現代でも、未だに無から食物が取れるわけではなく、食糧問題が解決していない地域が、まだ多くあることは。

だが、地球上の誰も知らなかった。

マルコと呼ばれた研究員は、過去の植物や文化にも詳しくあったことを。

あの草は、小麦と呼ばれるもので、今は珍しくなった食文化の根幹を支えていた、栄養豊かな穀物だったことも。

## 国旗掲揚

雨森

「――ここまで来れば大丈夫だろう」

「奴らではこの高い崖を登っては来れまい」

「勝ったな」

「……」

「しかし俺たちもまた手負いだ。特にお前の傷を早く治さねば」

「なあに、心配いらないさ。俺は強運の持ち主なんだ、この程度」

「そうだったな」

「故郷に婚約者を待たせているんだ。早く戻りたい」

――こいつらの会話を黙って聞いているうちになんとか俺は怖くなってきた。

『お前ら、ちょっと冷静になって考えてみろ』などとという言葉まで口を突いて出てきたので三人はキョトンとした顔で俺の方を見た。

「何が怖いんだ？」

「お前が臆病風とは珍しいな、らしくないぞ」

「もう勝ったんだ、俺たちは。ああ、早く彼女の所へ戻りたい」

『だから、それをやめろっての！ 死亡フラグを知らんのか！』

「死亡……フラグ？」

三人の表情に暗い影が差した。

「新しいフラグメントグレネードの名前か？ 死亡だなんて縁起が悪いぞ」

「そうだ、お前は場の空気というものに少しは気を使うべきだ」

「ああ、早く彼女に会いたい」

『だからそれが死亡フラグだったの！ お前のその彼女が～って奴が！』

「俺？ なんでだ？」

奴はそう言いながらも愛しげに婚約者の写真を手で撫でている。

『いいか？ 戦場で恋人の話をする奴は、間違いなく死ぬ』

「え？」

奴の手が止まった。その両目には驚愕の色が宿っている。

「おい！ 少しは考えろよ、そんな事言ったら奴がビビっちゃうだろ？」

「俺達の最高のチームワークにヒビでも入れるつもりかお前は？」

『ああああ！！』

堪らずに俺は叫んでいた。最高のチームワークとか言ったらそれこそチーム崩壊のフラグじゃないか！  
『絶対に安全だと1000%確信するまでは少しも気を緩めちゃダメなんだ！ 勇ましいセリフも逆に危ない！ それをお前らは分かってない！』

「100%の間違いか？ アホだろお前」

『100%でも足りないって意味で言ってんだよこのヴォケ！』

「なんだと？」

『とにかく！ 勝利なんて確信しちゃいけない。婚約者の話も将来の話もNGだ。(もうダメ、俺たち死んじゃう) くらいの気弱さで丁度いいんだよ』

「なんか危なくないか、こいつ？ 俺怖くなってきた」

「今はお前に合わせてやるよ。俺たち死んじゃうくらいが良いんだな？」

「いや、なんかそう言われるとマジで死にそうな気がしてきた。もう彼女の話はしないよ」

やっと俺は一息つけた。この窮地で俺の意図を理解してくれる仲間で良かったと思えた。

『ありがとうお前たち。勝者の余裕とか明日への希望なんかは今は捨てるんだ、生き延びるために！』

「おお！」

そう言うと一人が

「しかし、この崖の高さは俺たちに余裕を与えてしまうな」

「もう少し低い方が気弱になれそうな気がする」

「降りるか……。死んじゃうくらい気弱な方が生き残れるんだろ？」

『――え？』

三人は次々と崖を滑り降りていった。

俺が余計な事を言いさえしなければこんな結果にはならなかったのだ。だからせめて完璧なチームワークだけは崩壊させまいと俺も三人の後に続いて崖を滑り降りた。

「やつら、案外チョロかったな」

「全くだ。この程度の連中、俺達の相手には役不足」

「完璧な勝利だ」

「しかし俺たちもまた手負い。お前の傷などは深刻だ治療を急がねば」

「いらぬ心配だ。この程度」

「そうだったな」

「早く故郷に戻りたい」

「――おい、お前たち。死亡フラグというのを知らんのか？」

## ひどい話

永坂暖日

「ねえ、ひどい結末の話だと思うでしょう」

右足を組んで頬杖をつき、彼女は言った。でもひどいと言う割に、緋色の口角の端は上がっている。目も、面白がっているようだ。

彼女の話した内容が他人のことであれば、人の不幸は蜜の味ということで、そういう表情もありかも知れない。だけど、彼女が話したのは彼女自身に起きた出来事なのだ。とても笑っていられるような状況ではない。

少なくとも、自分なら笑えない。

「だって、あんまりひどすぎて、もう笑うしかないじゃない」

あっけらかんと言う。

彼女が強いから、なのだろうか。

自分が弱いから、なのだろうか。

低いテーブルを挟んで向かい合う彼女は、自分が店に入ってきたときから変わらず笑みを浮かべている。それはいつもの彼女の笑顔で、自分を虜にする妖艶な笑みで、でも心の奥を見透かすのを許してくれない鉄の仮面のようで。

ようやく初めて、彼女の過去の一端を教えてくれたと思ったら、愛想笑いさえできないような内容だった。

出会ったその時から、彼女に夢中になった。恋人という立場を手に入れるために、ずいぶんいろいろなことをしたと思う。我ながら情けないこともやったと、今になって反省、というか後悔することもある。だけど、やっとその立場を手に入れた今、そんな過去はひっそりと自分の記憶の秘密の箱にしまって、恋人という立場を大いに楽しみたい。

それはしばらくの間、うまくいっていた。彼女と過ごす時間は甘く楽しく、夢のようだった。だけど、ひとつ手に入ればもっと、とさらに望んでしまうのが人の悲しいさが。彼女が、彼女自身のことをなかなか話してくれないと気がつくまでに、そう長い時間はかからなかった。

自分と出会う前、何をしていたのか。どこで、どんな風に、何を思いながら生きてきたのか。嬉しいと思うこと、楽しいと思うこと、嫌だと思うこと、嫌いだと思うこと、悲しいと思うこと――彼女の感情を形作るそれらの一端を知りたいと思ったのに、彼女はなかなか、いや、まったく教えてくれなかった。

聞いてもはぐらかされる。

嫌なことならまだしも、嬉しかったことや楽しかったことまで教えてくれないなんて、まるで信用されていないみたいだった。

自分が悲しいのはまさにそれだと彼女に言っても「そう」というあっさりした答えしか返ってこない。

それで愛想を尽かして離れてしまえばいいかも知れないが、惚れた弱みでそれも難しい。そのうち、彼女の過去に触れるのはやめるのが、お互い——自分のためにいいと思って、やめてしまった。

自分という今の方を大事にすればいいか、過去なんてどうでもいいじゃないかと開き直って、それでやってきた。いつものように待ち合わせて何気ない話をするうちに始まったのが、彼女の告白だ。

驚いたし戸惑った。ようやく話してくれたと嬉しくも思った。だけど、聞いていて辛くなるような内容で、だんだんと気持ちは複雑になった。

どうしていきなりそんなことを話したのか、理由は何となく分かる。彼女のタイミングで、話したかったのだろう。今まではぐらかしてきたのは、それを自分に話してもいいのかどうか見極めていたからだろう。

容易に人には話せないような過去を教えてくれて、ありがとう。

自分を信用してくれて、ありがとう。

笑って話してくれたのは立ち直ったからかも知れないし、そうではないからかも知れない。けどそのどちらでも自分は構わないから、君の過去はすべて受け止めるから、これからは一緒に楽しくて嬉しいことを積み重ねていこう。

「そうしたかったけど」

彼女は変わらない笑みのまま、冷めたお茶の入ったカップを持ち上げる。

「他人の深いところまで立ち入りたいて思う人と、これ以上は付き合えないの」

空になったカップの縁に、彼女の唇の形で緋色が残る。

とても笑って話せるようなことではない過去を自分に教えてくれたのに、どうしてそんなことを言うのか分からない。

カップを置いて、彼女が伝票を持って立ち上がる。

「わたし、表面上のお付き合いだけで十分なの」

でも、ずっと教えてくれなかった過去を教えてくれたじゃないか。

そう言ってすぎる自分はずいぶんと情けないが、構っていられなかった。

すると、彼女は今までで一番の笑みを浮かべた。

「今の話、全部嘘なの」

呆気にとられる自分を置いて、彼女は支払いを済ませ颯爽と去っていった。

## 監視カメラ

ドーナツ

署の管轄内で警官による殺人事件が発生した。

相手の未成年は、札つきの不良少年である。このまま生きていたところで将来、犯罪者になるのは確定事項だ。

事件発生時に組まされていた警官はもちろん誰も証言をする気などない。少年の家は貧しく、訴訟の費用はおろか明日の家賃の支払いも怪しかった。

暴発事故として処理することに署内は一致している。警察というのは一種の家族だ。実際に親や親類が同僚の場合も多く、連帯は強い。しかし、この決定を当の本人、被疑者である警官に伝える術がなかった。なぜなら署内のいたるところにカメラが設置されており、取調室は、その最たるものである。つまり、記録が残ってしまうのだ。パトカーの車内も同様である。

彼は、当然ながら動揺していた。普段ならば気付いたであろう俺の仄めかしにまったく反応しない。猜疑心の塊だ。

俺は腹部から血を流しながら車のシートを這いずる。

「嫌だ、嫌だ。刑務所になんか入らないぞ。俺が何をしたって言うんだ。あんなチンピラ、どうだっていいだろ？」

俺の銃を構えている彼の呪詛に頷いた。言葉を絞り出そうとした俺は更に二発、撃たれる。

仲間意識が遮音材の上を赤く流れていた。

投稿時刻 : 2014.02.08 19:19

総文字数 : 1280 字

獲得☆ 3.400

《執筆オフ・ルポタージュ賞》  
バッドエンドについて  
ayamarido

中国製の安いPCを捨て、いざ待望のソニーVAIOを購う時きたれり、と意気揚々と発注した矢先、ソニー本社において、VAIOブランドを外資へ売り払う決定がなされた。

すなわち、

「これはバッドエンドではないだろうか」

と思うただけけれど、さほどバッドでもなし、そもそも、

「ソニーのVAIO！」

を入手できるのだから、これはむしろグッドじゃないかと、自らを慰められるので話は違う、では何がバッドエンドであろうかと考えたところが、

「ふひひ、書こうとした小説が最後まで思い浮かばないことがバッドだぜ」

で、幕引きを図ることでどうだと考えたただけけれど、その程度の発想をする人なんて何人もいるだろうし。

「じゃあ、この雪だ。東京に遊びに来た挙句、この大雪で新幹線がとまって家に帰れない。停電も起きた。ああ何て悪い結末だ！」

と尝试してみたところが、やっぱり、おもしろくも何ともない。

思い返せば、うえはるさんの入選絵を見るべく訪れた渋谷から、浮世絵の太田記念美術館の原宿まで歩いたその間、ずっと細川護熙の選挙カーと併走する破目になり、ガラス製の、パンダのオリみたいな選挙カーの荷台に、二人のおばさんと、一人のおじさんが乗り込み、赤い服を着て、マイクを握ったおばさんが、「細川護熙、細川護熙。ほ、そ、か、わ、護熙。ありがとうございます。ありがとうございます。助手席に乗っているのが本人です。最後のお願いに参りました。細川護熙。細川護熙。道の反対側からも温かいご声援、ありがとうございます。細川護熙。細川護熙。脱原発。原発が一台も稼動していない今がチャンスです。日本の未来は東京が変える。細川護熙。細川護熙。明日の選挙ではどうぞ、細川護熙、細川護熙を、皆様、何卒よろしく願います」

と叫んでいるのを、ずっと聞かされていたことが、バッドかもしれない。選挙カーはノロノロと走るので、徒歩のこちらとさほど速度が変わらず、従って延々と、

「細川護熙、細川護熙。あたたかいご声援ありがとうございます。助手席にいるのが本人です。ありがとうございます。明日の投票では細川護熙。細川護熙。どうぞよろしくお願いします」

である。

ガラスの檻を見るに、おそらく最初のうち、檻の中には本人、細川護熙が入って手を振っていたのであろう。だがそのうち寒さに耐えかね、助手席へ移って、膝に毛布を置いて、そうして通行人に手を振るに至ったようである。

「ありがとうございます。ありがとうございます」

などと、おばさんの叫び声の合間、頼りないマイク音声が聞こえた。

「ありゃきつと風邪でも引いてるぜ。かわいそうに」

と、そんな想像をしたところで、ああなるほど。これで明日、彼が落選したなら、この数週間のお祭騒ぎも水の泡。連呼もむなしきかぎりなり。

すなわち、

「明日の選挙結果こそバッドエンドに相違なし」

と、最終的にニヤリとしたところ、ところで斯様に細川護熙細川護熙と連呼したこの短文、公職選挙法に引かかるんじゃないのと疑われ、これ最終的に掲載すること能わずとなれば、

「書いても発表できないなら、まさしくバッドエンドですね」

と、隣からニヤニヤ。

(了)

投稿時刻 : 2014.02.08 18:43

総文字数 : 921 字

獲得☆ 3.312

## ハイパーメディアクリエーター（笑）

松浦徹郎

黒歴史なんて言葉があるが、程度の差こそあれ誰にだって思い当たることのひとつやふたつはあるはずだ。

ほら、中学生の頃を思い出せよ。

ちょっと人には見せたくないようなノート、作ってなかったか？ オリジナルの必殺技とか、そういうのが描いてあるやつだ。

高校の頃、深夜ラジオに投稿はしていたか？ ストーカーみたいにはがき送って。それで、いつかは自分があっち側にいけるって信じていなかったか？

俺は大学まで引きずっていた。

完全にこじらせていた。

イベントでオタ芸を打つような、開き直りはできなかった。もう完全に業界人になるって決めていたから。消費オタにはならないって。

仲間も何人かいたよ。同志だよ。

だけど、みんな就活とかを前に消えていった。

金融を目指したり、手堅い資格を取りに行ったり。

俺は違ったけどね。

覚悟が違うんだよ。連中とは。

だから成功したんだ。

絵は描けない。作曲もダメ。

だけど俺、クリエーター。

ほら、ものを創るのって感性の問題だからさ。

え？ 具体的に何してるのって??

そりゃ、いろいろな方面とタイアップとか？

細かいことはしないよ。それは職人さんの仕事だから。ほら俺クリエーターだから。

仕事は絶好調。ヨドバシカメラのゴールドポイントだって百万単位でたまってるし。いい加減、ポイント使ってくださいって店員にいつもいわれるんだよね。

芸能人とも交友関係多くて。飲むのも仕事かな？ こんな風にね。

ほとんどのやつが黒歴史って言って目を背けてきた夢を、俺は叶えたの。

つまり勝ち組。

どうどう？ 俺のトーク。

なんか楽しくない？

次、なんの目が出るかな。

ほらキミ、さいころふって。何が出るかな、何が出るかな――。

え？ 他の席から呼ばれた??

ああ、そうなんだ……。

じゃあ、……って、キミも??

あれあれ？ みんな行っちゃうの？ なんだよ、寂しいなあ。

もっと話そうよ。楽しいじゃん！

なんだよもう！ 俺ほっといていいの？

宴はこれからだっていうのに！

ああ、黒服くん。ちょっと3人くらいそろえてよ。女の子。

無理？ 飲み過ぎだから帰れって？

わかったよ。もう来ないよ、こんな店！ ワーン、もう来ねーよ！ ってやつ。

それじゃ、支払はツケで。うん。今、持ち合わせないから。

なっ、なんだよ！ いきなり腕固めてきて。暴力反対！

投稿時刻 : 2014.02.08 21:48

総文字数 : 992 字

獲得☆ 3.571

※制限時間後に投稿

## 最初に目に映ったものは

志菜

最初は、きみの笑顔だった。

何も言えずに黙っているぼくに、きみは手を差し出して、

「遊ぼう」

と、言ってくれた。

ぼくは、びっくりして、恥ずかしくて、でもうれしくて、「うん」と頷いた。

それから二人で一緒に遊んだ。

ツヤツヤした椿の葉っぱを丸めた雪の上に乗せて、お菓子屋さんごっこをしたり、真っ赤な南天の実と笹の葉を取ってきて雪うさぎを作ったり。雪合戦もしたね。

そうしているうちにも、また雪はちらほら降り出してきて、きみはかまくらを作ろうと言った。

前にテレビで作り方をやってたんだって。かまくらの中に入ると暖かいんだって。

でもかまくらを作るには、まだまだ雪は足りないから、ぼくときみはあちこちから雪を集めてきた。

駐車している車のボンネットから。ブロックの塀の上から。日陰になった沓脱石の上から。

小さな雪の山ができたところで、辺りは暗くなってきた。ぼくはもう少し一緒に遊びたかったけど、きみは家の人が心配する前に帰らなくちゃいけないと言った。

だから、ぼくときみは約束をした。

明日もまた一緒に遊ぼうって。かまくら作りの続きをしようって。

二人だけの約束をしたんだ。

次の日、きみは学校に行った。

見送るぼくに、ランドセルを背負ったきみは

「帰るまで待っててね」

と、笑顔で言った。

ぼくもきみに負けなぐらいの笑顔で「もちろんさ」と笑った。

その日は昨日と違って、とてもいいお天気だった。

柔らかな日差しが暖かくて、かまくらの中とどっちが暖かいかな、なんて考えながらぼくはきみの帰りを待っていた。

お日様がどんどん高くなるにつれて、暖かくて気持ちよくて、ぼくは眠くなってきた。きみがいなくて退屈だったしね。

そして、夢の中で、きみと一緒にかまくらを作ったんだ。

大きな大きな山を作って、シャベルで叩いて硬くする。それから入口を作って、どんどん中をくりぬいていくんだ。

とても素敵なかまくらができた。夢の中でぼくたちは、並んで座って、白い世界をずっと眺めていた。

水色の、プラスチックの二つの目で、キラキラと光る雪を見ながらぼくは、ずっと、ずっと、一緒にこうしていたって思ったんだ。

「あー、やっぱり溶けちゃった」

走って帰ってきた少女は、溶けた雪の塊の前で呟いた。小さく口をとがらせて、雪だるまの目玉にしていた水色のペットボトルの蓋を拾い上げる。

そのままポケットに入れて家に帰りながら、少女は小さくしゃみをした。

——終——

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

## 終わりに

---

初の執筆オフ同時開催となりました第 14 回てきすとぼい杯、お楽しみいただけましたでしょうか。

開催当日の 2 月 8 日は、関東地方で記録的な大雪となりまして、執筆オフ会場の周囲にもどっしりと雪が降り積もり、交通機関の麻痺や、地域によっては停電まで発生するという、容易には忘れられない一日となりました。

そんな悪条件にも関わらず、最終的には四人の作者さまが会場までお越しくださいませ、なんとか予定通り、オンライン競作+執筆オフの開催がなりましたこと、また、遠方から会場ハングアウト中継にご参加くださった皆さまへも、感謝の言葉よりほかありません。

さて、今回のお題「バッドエンド」。久々に簡単・ゆるい、というご意見が上がる一方で、厳しい・苦手、という言葉も聞かれるなど、普段からの作風によって得手不得手が大きく分かれるお題でしたようです。

また一口にバッドエンドと言いましても、「バッド」の捉え方、結末に至るまでの過程や演出には、それこそ多彩なバリエーションがあり、お寄せいただいた 12 作品中に、題材や結末がかぶったと思えるものが一つもなかったことも、大変興味深い結果であったように思います。

執筆オフにつきましては、進行や中継機材の不備、開催時期などに反省点も多くございますが、ひとまず大過なく開催でき、会場からの投稿も無事行っていただけましたこと、ご参加・ご協力いただいた皆さまに感謝しますとともに、時期など未定ではありますが、いつかまた機会がございましたら類似の形態での執筆会開催なども検討してまいりたいと考えております。

――最後になりますが、今回もそれぞれにユニークな仕掛けや工夫の凝らされた、魅力的な作品をお寄せくださった作者の皆さま、執筆オフおよび中継ハングアウトにご参加くださった皆さま、オフ開催地検討にご協力くださった皆さま、そして、投票・感想・チャットにご参加くださった全ての皆様に、改めまして心よりの感謝を。

そして何よりも、今回、執筆オフの開催をご提案くださった永坂暖日さんに、この場を借りてお礼申し上げます。素敵なお提案、ありがとうございました！

てきすとぼい杯は、来月より通常開催に戻りますが、引き続き、毎月中旬頃の土曜夜に定期開催を予定しております。お時間ございましたら、どうぞお気軽にご参加くださいませ。

2014 年 3 月 7 日  
てきすとぼい杯 運営担当

※なお、次回てきすとぼい杯は、明日 2014 年 3 月 8 日 (土) 開催の予定です。





作品集電子書籍をPubooにて頒布中。

# 言葉の茂る 樹が育つ。



てきすとぽいは、競作や共作を支援する  
テキスト創作サイトです。定期開催や、  
利用者主催の競作イベントが、日常的に  
開催されています。

感想やアドバイス、採点などを通じて、  
作家同士が言葉を交わしあい、言葉の  
やりとりが豊かに茂り広がっていく。そんな  
サイトにあなたも参加して、一緒に創って  
いきませんか？

いつかきつと言葉の大樹になると信じて。

てきすとぽい杯作品集  
〈第14回〉

<http://p.booklog.jp/book/83460>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/83460>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/83460>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ